審議会等の議事の要旨（要点）

（基本情報）

会議名称	第 13 回　立川市地域福祉推進委員会・第５次立川あいあいプラン 21 推進委員会　合同会議
開催日時	令和５年６月 21 日（金曜日）午後７時 00 分～午後９時 10 分
開催場所	立川市総合福祉センター（２階　第１活動室、第２活動室）
次第	１．委員長あいさつ ２．事務局あいさつ ２．前回のふりかえり ３．地域福祉アンテナショップの活動状況報告と情報発信 ４．中間評価により見えてきた課題と次期計画策定に向けた取組の方向性について ５．その他
配布資料	１．第 13 回立川市地域福祉推進委員会・第５次立川あいあいプラン 21 推進委員会議事次第 ２．第 12 回立川市地域福祉推進委員会・第５次立川あいあいプラン 21 推進委員会議事録 ３．地域福祉アンテナショップの現状について ４．立川市第４次地域福祉計画　中間評価 ５．地域福祉アンテナショップ　～既存の活動に加え、さらに充実させていきたい取組の方向性～（概要版） ６．地域福祉アンテナショップ　～既存の活動に加え、さらに充実させていきたい取組の方向性～
出席者	［委員］ 熊田博喜（委員長）、宮本直樹（副委員長）、小野寺隆司、高田利花、藤原紀子、渡邉明日香、石田芳朗、井村良英、菅根浩子、野々久美子、山川清隆、宮﨑綾乃 ［事務局］ ＜立川市＞ 五十嵐智樹（福祉保健部長）、小平真弓（地域福祉課長）、石丸亮太（地域福祉推進係） ＜立川市社会福祉協議会＞ 枝村珠衣（地域活動推進課長）、小山泰明（地域づくり係長）、高橋美季、内金﨑快、吉田理恵（地域づくり係）
公開及び非公開	公開

傍聴者数	1 人
会議結果	以下の通り
その他	以下の通り
担当	立川市福祉保健部地域福祉課地域福祉推進係 電話 042-523-2111（代表）

主な意見、質疑応答

【1. 委員長あいさつ】
委員長よりあいさつがあった。

【2. 事務局あいさつ】
社会福祉協議会の人事異動に伴う事務局担当変更のあいさつがあった。

【3. 前回ふりかえり】
【資料１】に基づき、事務局より説明、地域福祉アンテナショップの情報発信のためのカードについて説明した。
＜委員長＞
現在、どこに設置されているのか。
＜事務局＞
→地域福祉アンテナショップ、関係機関に配置している。今後は福祉以外の分野も含め様々な場所に設置していけるよう進めていく。

【4. 地域福祉アンテナショップの活動状況報告と情報発信】
＜委員＞
協働型地域福祉アンテナショップ（ゆとりある茶話会、健康カフェ SANKI）の開催頻度や参加者はどのくらいか。
＜事務局＞
→ゆとりある茶話会は月１～２回開催し、毎回３人（同一人物）の参加がある。パンフレット等で周知を図り、参加メンバーが固定化しないようにしていきたい。
→健康カフェ SANKI は、月１回で少人数の相談会を開催し、毎回３～５人の参加がある。
＜委員＞
コロナ禍の影響で中止しているサロンは多いのか。
＜事務局＞
→サロン活動は再開しているところも多い。活動が停滞しているサロンについては、地域福祉コーディネーターが再開に向けて伴走支援を進めている。

＜委員＞
子ども食堂をやっているところが協働型地域福祉アンテナショップになる可能性はあるか。
＜事務局＞
→相談や情報交換の機能があり、開催頻度などが協働型地域福祉アンテナショップの要件に合致するようであれば可能性がある。

【5. 中間評価により見えてきた課題と次期計画策定に向けた取組の方向性について】
【資料3】に基づき、事務局より報告を行った。
＜委員長＞
地域福祉アンテナショップの横のつながりをどうするかが大切である。また、支援者を支援する仕組みが大切である。一生懸命やっているが、仲間づくりなどが十分にできていない部分もある。利用者だけはなく支援者も含めて孤立しない地域づくりをどうしていけばよいかと感じた。
＜委員＞
BASE☆298はボランティアの数が固定されてしまっており転換期に来ているように感じている。主となって動くのが、法人職員であったり地域福祉コーディネーターであったりする。どこまでボランティア、市民に運営をお願いしていけばよいのか考えながらやっている。
また、音楽を通じてBASE☆298を使いたいという声が集まってきている。情報発信手段など、そういった人たちの力を借りつつ運営していけないかと考えている。
支援者への支援というところでは、地域福祉コーディネーターの力はなくてはならないと感じている。
＜委員長＞
BASE☆298に集まっている人は地域ベースであるが、音楽を通じて使いたいという人はissueベースで集まっている。この人たちをどう融合させていくかという課題もある。
また、営利部門と非営利部門の関係についても今後考えていく必要がある。やはり営利部門の人達が入ってこないと地域は活性化してこない。そのため営利部門をどう活用していくかというのが、今後の起爆剤になるのではないかと考えている。
＜委員＞
福祉色を強く出さず、活動状況がわかりやすく、誰でも入りやすい居場所となるような活動というところで、居場所を運営している中で、参加している子どもの様子がちょっとおかしいと感じた時に、専門的な人につながるような仕組みがあることは大切である。
＜委員長＞
福祉色が出てないってどういう状況なのか。なにかを発見したときにそれをどうやってつないでいくのか。その仕組みを整理しないといけない。

＜委員＞
→大人同士が難しそうな話をしていたり、仕事しています感が出ていたりすると福祉色を感じる。また名札をしている場合も少し福祉色を感じる。視察のように見たり聞いたりするよりも一緒に活動してくれるとよい。
＜委員＞
横のつながりについて、地域福祉アンテナショップをやっている人たち自身が、他の地域にある地域アンテナショップの人と懇談する機会などがあった方が良いのではないか。互いの課題の意見交換をアンテナショップの人達だけで行う場が必要ではないか。
＜委員長＞
定期的な情報交換会、勉強会のようなものをやってもよいかと思うが、その一方でそういったことをやりすぎると敷居が高くなってしまう恐れがある。
同じ地域福祉アンテナショップとわかるようなエンブレムのようなものはあるのか。
＜事務局＞
現在、一部の協働型地域福祉アンテナショップではのぼり旗を設置している。

【6. その他】
各委員より、推進委員会終了に伴いコメントをいただいた。
＜委員＞
スタッフも参加者もお祭りごとのような楽しい雰囲気があればよいと思う。また、以前から農福連携のようなものができないかと考えていたが、スマイルキッチンができて、とても今後の展開に期待している。また、支援者が疲弊しない体制をぜひ構築してほしい。
＜委員＞
地域福祉アンテナショップの家賃負担についてとても心配している。どこも財政的に大変な中でやっていると思う。また、地域福祉アンテナショップが広がっていって、食事ができていない子どもが減るといいと思う。
＜委員＞
今は委託費と自主財源でおこなっているが、これを地域だけやっていくのは難しい。今後は企業などが参入していかないと難しい。また社会福祉法人などの参入なども必要であると思う。地域の人だけでやりませんかはつらい。
＜委員＞
公共施設を活用したパブリックの活用をお願いしたい。図書館なども従来の形ではなく新しい形での公共が展開できないか。民間も公共も力を合わせていく必要がある。福祉色を出さないというのは、いかに生活の中で出会っていけるかであるのではないか。
また、立川のシティプロモーション「(〇〇するなら)立川くらいが、一番いい」の取り組みを取り入れていけばよいのではないか。
今後の期待としては、

① １年くらいかかわってくれる若い人が集まってくるような仕組みがあるとよい。
② 期間限定でチャレンジできるような仕組みがあるとよい。
＜委員＞
地域福祉アンテナショップのイメージはなかなかピンとこなかったが、中身を見ていくことで最低限のイメージが持てるようになってきた。そのため、今までの取組を続けていくというのは大切であると感じた。
また、期間限定のチャレンジも大切であるが、いかに地域で継続していくかというのも大切であると思う。続いていくことが地域の安心感につながり、そこにあり続ける、動き続けるということも一種の専門性であると思う。
市民として地元の福祉について考えることができたのは、とても有意義であった。
＜委員＞
小学校の通訳協力委員をやっており、その中で外国ルーツだけでなく子どもの行動を見ているといろんなことが見えてくる。家庭環境によってさまざまな影響を子どもは受けている。また、子どもが自分のことを安心して話せる場をいかに社会で保証していくかが必要である。コミュニケーションによって相互を理解していく努力を続けていくことが大切であると思う。
＜委員＞
社会福祉協議会はどこのまちにもある。どこの社会福祉協議会も市民目線でかかわってくれる。多様な文化、多様な背景がある人が地域にいる中で、どんな人とでも一緒になって活動していける地域福祉コーディネーターは重要である。また、地域福祉アンテナショップは家賃を考えなくてもよい場所を活用していくことがよいのではないか。既存の空いている場所を１つでも多く活用してもらえることを渇望する。
＜委員＞
立場にかかわらず、一つの意見として受け止めてもらえたことはうれしかった。今後も学生の委員を入れてもらいたいと思う。
＜委員＞
大人が自分の育ってきた感覚で子どもに接すると、今は少しずれていることもある。全国的に各クラスに１名程度の不登校生徒がいる。施設がきれいなところには子どもたちが集まり、施設が汚れているところには子どもたちは集まらないということもある。予算や資金は必要なところに投入していくことが必要である。
＜委員＞
コロナ禍でかなり状況が変わってきた。地域のつながりはこれからも大切である。今後も社協と一緒に地域にかかわっていきたい。
＜委員＞
多様な立場の委員がいて、多様な視点がありとても勉強になった。支援者も一緒に楽しむということがとても大切である。自分は支援者であると思ってしまうと楽しむことを忘れ

てしまう。支援者も一緒に楽しむということを思い出しながら地域活動に取り組んでいきたい。

＜委員長＞

策定から推進まで関わらせてもらい、改めて立川のすごさを感じている。地域福祉コーディネーターや重層的支援体制整備事業はどこの地域でもやっている。それがうまくいくか否かはその地域の力である。立川という地域の特性や、地域にいる専門職の力でもある。そういった意味では、立川はとても力のある地域である。今後も立川という地域を盛り上げていきたい。